

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-169	12-065	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)		
The importance of alcoholic beverage type for suicide in Japan: a time-series analysis, 1963-2007. 日本における自殺に対するアルコール飲料の種類的重要性：時系列分析 1963～2007		
執筆者		
Norström T, Stickle A, Shibuya K.		
掲載誌		
Drug Alcohol Rev. 2012 May;31(3):251-6.		
キーワード		
自殺、スピリッツ、日本		
要 旨		
目的： 日本は世界の中でも最も高い自殺率を有する国の 1 つである。日本では飲酒が自殺のリスクファクターであるということがコホート分析により示唆されている。しかしながら、集団における一人あたりの総飲酒量において解析した時は、この関係は観察されなかった。本研究では時系列分析を行い、これらの矛盾した結果が、アルコール飲料の種類による自殺への特異的な効果の存在によるものであるのかどうかについて検討した。		
方法： 1963 年から 2007 年までのアルコールの種類と自殺率との関係性を評価するのに、自己回帰移動平均モデル (Autoregressive integrated moving average model) を用いた。データは、15～69 歳での年齢調整自殺率と一人当たりのアルコール飲料種類別飲酒に関する情報から構成された。コントロール変数として非雇用率を含んだ。		
結果： 1963 年～2007 年の男性自殺率は、女性のそれがわずかに減少したのに対して、増加した。スピリッツ消費は、1 リットル飲酒量が増える毎に 21.4% (95%信頼区間 3.2～42.9) の男性自殺率増加を伴い、男性の自殺率に有意に関連していた (しかし女性ではそうではなかった)。自殺は他のどのアルコール種類 (ビール、ワイン、その他) の飲酒とも統計学的に有意な関連性は認めなかった。		
結論： 本研究は日本におけるスピリッツ飲酒と男性自殺率との関係性を示した最初の研究である。有望な政策変更は、課税を通してのスピリッツ価格上昇、アルコール入手の減少や多量飲酒習慣の防止などを含む。		